

徐々であり不斷である。絶えず徐々に進歩して行く兒童の性質に應じて教育し様と云ふには矢張り徐々と長い間に目的點に達せんことを勉めなければならぬので一概に彼は未だ小供だ錢を持たず可らずと云ふ譯には行かないのである。

上杉憲山公の言に

女房と云ふは、喩へば朝顔の蔓の如く、夫は垣の様なるものにて候、此垣にすがり申さず候ては、花咲き實のり候事は之なく候、垣にはなれ候へば只草むらにとまり人の詠めともならず、みす／＼花も咲かず果は牛馬の爲ゆに踏み散らされ又來る年に咲くべき種もなく、惜しき花の色も一年切りにて影も形もなくなり候ことに候、されば又夫は此花を愛して水を注ぎ露を含ませ取り育て、花を咲かせ飽かずながめて纏て散り果て候へば、又來る年こそ見むと種を取りてかこひ置き候へば、幾年も同じ咲き分け綻り結、それぞれ色を失はず、行末目出度花咲き榮え候事に候、此心を思ひ遣りて、夫は女房に情あり、女房はもとより夫を大切に於て夫婦睦しく候へば其子孫繁昌し長く孝を務め亡き跡までも、由々敷帛はれ候ことは、我人も願はしき事には之なく哉

子供の歯

ドクトル 大屋 要作



人齒生育の機能を發する端緒は、胚胎後第七週日より始まり顎骨は胚胎後五週日にして化骨作用を始め、乳齒の發生は生後約六ヶ月より芽出し、約二年半に至れば悉く整列します、勿論時々發生の順序に差異はありますが、通例下齒の發生は上齒よりも數週日早いのが常です、先づ下顎の中央切齒出齦し、次に一週若しくは一二ヶ月を経て、相對する上顎の中切齒が芽出し、次に下顎側切齒上顎側切齒、又第一臼齒及び犬齒現はれ、終りに第二臼齒が發生して、上顎下顎都合二十で乳齒を完成するのであります。

往々變則の發生を認めることとあります、それは

小兒の體格の羸弱な爲めで、普通の發育した小兒ならば、發生期には唾液分泌も近邊するに隨つて増加し、假令些少の不眠、僅少の食欲缺乏、輕微の口内増温を來たすにもせよ、敢て患苦を誘起するものではありませぬ、又小兒自身も口腔内に指頭を押し入れ、或は衣類等を咬んで其不安の醫すのが通例であります、之に反して發育と吸収との間に緩急遲速を生ずる時は、刺衝を起して最も劇甚の症状を帶ぶるともいいます、假令ば腦脊髓系でも侵されると、不安不眠頭痛播弱、又呼吸器系なれば咳嗽、加答兒、氣管支炎、肺炎を發し、消化器系に於ては惡心嘔吐食欲缺損、下痢、又皮膚の襲はれし場合には濕疹、疱疹等を發することもあります。

要之乳齒發生期は小兒の大厄期でありまして、此期に於て播弱、小兒霍亂等の爲めに生命を失ふ數は、枚擧に遑なさばかりです、仍て此期は兩親の最も注意すべきときであります、切て安全に乳

齒が發芽を終りたる時は、懇切なる齒科醫に依頼して、充分の診察を乞ひ、若し構造不全又は缺損部があるなれば、手後れなく完全な治療を受けねばなりません、其治療の主眼とするところは、永久齒の發生まで乳齒の腐蝕の豫防法であります、又齒科醫の注意すべきことは、治療の際に小兒をして苦痛を感ぜしめざるやうにし、齒牙の治療は決して痛いものではないとの觀念を小兒に抱かしめ、何時にても喜んで治療を受くるやうにせねばなりません、兎に角小兒の齒牙腐蝕豫防法は兩親の大責任と存じます、且つ常に齒牙を清潔に保つことを教示し、一年に二三回は必ず懇切なる齒科醫に診察を乞ふことも必要であります、若し又充填を要する時は、永久齒とは異ひ煉物の材品で充分です、俗に云ふセメント、ゴムなどを用ひてよろしい、金屬などを充填し長き時間を費やして、小兒に倦厭を與へる必要はありませぬ、世には乳齒に金充填又は他の金屬充填をする齒科醫もあり

ますが、それは乳齒の如何なるものなるかを知らぬ故であると思ひます。

第四年に至りますと前齒の間に少しく分離が始まりますが、其分離は益々増加して参ります、つまり永久齒が正當なる方法を以て排列し、口内に來ることを示すので、若し此の分離が行はれざるときは、永久齒は適當なる位置に排列することが出來ないのであります、又顎骨の後部には永久齒第一大臼齒の發育する部位を作り、またかくて約六ヶ年頃より前齒四個は容易に動き始め、此時から乳齒脱落し永久齒の發生期となるのであります、此乳齒の抜ける時期の到來に對し兩親は齒牙に注意を傾け、適當なる時期には猶豫なく乳齒を抜去し、永久齒に正當なる位置を與へるやうにせねばなりません。

併し此診斷法は一定の法則がありません故、齒科醫も充分經驗ある熟練者に依頼する方が安全であります、假令ば小兒の前齒が少し不正列でいもあ

ると、永久不正列になりはせぬかの懸念より、注意をし過ぎた結果として、齒科醫に依頼して四個の前切齒に充分の位置を與へんとてまだ時期の來らぬ乳犬齒を抜き去るやうな事が往々あります、其結果切齒四個は正列しても永久犬齒を容る、餘地を失なひ、加之顎骨の發育をも停止し、第二大臼齒の發育の爲に、後方から壓迫せられ、犬齒は全く齒窟外に發生し、終生見苦しき形狀となる故に假令前齒が不正列でも、十一才頃までは決して乳犬齒を抜去してはなりません、造化の妙工は障礙物の存せざる限は、必ず排列を完成するものであります。

以上述べ如く乳齒の發生期及永久齒の發生期は最も複雑なもので、且つ小兒にも最も危険の時代でありますから、父母たるものは深く注意を拂はねばならないのであります。